

## 宮沢トシの信仰とジェンダー

牧野静

### はじめに

本報告は宮沢賢治(1896-1933)の妹、宮沢トシ(1891-1922)の信仰とジェンダーの問題を扱うものである<sup>1</sup>。

宮沢賢治は日本近代文学史上、他に類例をみないほどの人気を誇る文学者である。その賢治の創作上の重要なモチーフとなっているのが、本報告で主題とする妹トシである。トシは『春と修羅 第一集』においては夭折の妹として登場し<sup>2</sup>、『銀河鉄道の夜』においては主人公ジョバンニと共に銀河を旅するカムパネルラのモデルとなったと言われることもある。現代に至るまでの賢治を扱うコンテンツにも、トシはたびたび登場する<sup>3</sup>。トシは基本的には夭折の健全な妹として、賢治の創作意欲を掻き立てる存在として扱われてきたといえる。

言うまでもないことだが、実在するトシは創作上のモチーフではなく一個の人格である。本報告ではトシを、信仰の確立に烈しく苦悩したひとりの存在として考察する。またその葛藤には、当時のジェンダーにかんする言説が、何らかの影響を与えていたという仮説を検証する。そのようにトシを扱うことは、近代日本の宗教と女性、社会と女性を考察する手がかりとなり、ジェンダーの観点からの近代仏教研究<sup>4</sup>を行うものとしての意義も打ち出せるだろう。

---

<sup>1</sup> 本報告における賢治のテキストは宮沢賢治『【新】校本宮沢賢治全集』(筑摩書房、1996-2009年)を底本とする。また[巻数・頁数]の順に表記する。トシのものに関して、宮沢家宛の書簡は堀尾青史編「宮沢トシ書簡集」(『ユリイカ』臨時増刊号、1970年)、151-164頁を、近角常観宛書簡は岩田文昭・碧海寿広「宮沢賢治と近角常観——宮沢一族書簡の翻刻と解題」(『大阪教育大学紀要』第一部門第59巻第1号、2010年)、121-140頁を底本とする。また「自省録」については山根知子『妹トシの拓いた道——「銀河鉄道の夜」へむかって』(朝文社、2003年)を底本とする。なお、本報告は『近代仏教』25号(日本近代仏教史研究会、2018年)に掲載された「宮沢トシの信仰——「我等と衆生と皆俱に」」の成果を踏まえている。

<sup>2</sup> 賢治は「永訣の朝」においてトシが末期に食べた雪が「天上のアイスクリーム」になるよう祈る。実際に賢治はトシの看病中にアイスクリームを手作りして食べさせたことがあり、2013年1月26日にはNHKEテレ「グレーテルのかまど」にてこの時のアイスクリームを再現するレシピが紹介された。

<sup>3</sup> 例えば2017年にWOWOWで放映されたドラマ『宮沢賢治の食卓』では、トシと賢治の交流が繰り返し描かれ、トシはごく重要な登場人物として造形されている。

<sup>4</sup> 日本の近代仏教史の登場人物はその大半が男性であり、近代仏教とジェンダーに関する研究は、現状、未だ不十分(碧海寿広「近代仏教とジェンダー——女性信徒の内面を読む」(『日本思想史

## 1. 宮沢トシとその苦悩

ここではまず、トシの生涯を簡単に概観し、彼女が何に苦悩していたのかを確認しておく。

トシは1898年、宮沢家の長女として誕生した。賢治の二歳下の妹である。花城尋常高等小学校では第一学年から全科目全甲を通し、第四学年で模範生として表彰される。岩手県立花巻高等女学校在学中も第一学年から卒業まで首席であった。卒業式では総代を務める。1915年に日本女子大学家政学部予科に入学し、翌年本科に進む。1918年12月、卒業間際に体調が悪化し、入院する。入院生活は40数日間にわたり、上京した母イチ(1877-1963)と賢治の看病を受ける。3月初めに賢治とともに花巻に帰省し、療養生活に入る。同月、見込み点をつけられ卒業となる。1920年9月には体調回復に伴い母校花巻高等女学校に奉職する。しかし翌1921年9月に咯血し、退職する。1922年11月27日、死去。わずか24年の生涯であった。

トシは非常に成績優秀であった。その人柄は、実弟の清六(1904-2001)によれば「とても内気で、おだやかで、出しゃばらない人」だったという。

しかし、賢治のテキストを注意深く読んでいくと、トシがけっしておだやかでおとなしいだけの存在ではないことが浮かび上がってくる。先に挙げた「永訣の朝」には、トシの末期の言葉として「(Ora Orade Shitori egumo)」というフレーズが記録されている。これは花巻方言をローマ字であらわしたものであり、「私は私でひとり行きます」という意味に解することができる。トシの言葉として、ほかにも「(うまれでくるたて／こんどはこたにわりやのごとばかりで／くるしまなあよにうまれてくる)」という記述も見られる。トシには「生まれてくるとしても、今度はこんなに私のことだけで苦しまないように生まれてきます」と述べながら死に臨む、覚悟と意思の強さがあった。トシのこのような覚悟は、どのような人生経験を経て、形成されたものなのだろうか。

実はトシは高等女学校時代に、生涯尾を引き続ける恋愛事件を経験してい

---

学』45、2013年)、162-180頁)であるという指摘が行われて以降、本報告(2020年2月21日)に至るまでに、次に挙げるような研究が登場してきている——丹羽宣子『〈僧侶らしき〉と〈女性らしき〉の宗教社会学——日蓮宗女性僧侶の事例から』(晃洋書房、2019年)、Jessica Starling, *Guardians of the Buddha's Home: Domestic Religion in Contemporary Jōdo Shinshū* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2019)、岩田 真美・中西直樹編『仏教婦人雑誌の創刊』(法蔵館、2019年)、那須英勝・本多彩・碧海寿広編『現代日本の仏教と女性——文化の越境とジェンダー』(法蔵館、2019年)。それらの登場を踏まえつつ、本報告は碧海前掲書において提出された「女性信徒の内面を読む」という視点からの考察を行う。

る。1914年、花巻高等女学校最終学年の頃、トシは新任の音楽教師に恋心を抱きつつ、個人的交流を持つ。それは人々の噂の種となり、1915年3月20日から22日までの三日間にわたり、『岩手民報』に「音楽教師と二美人の初恋」という、虚実取り交ぜたゴシップ記事として掲載されることとなる<sup>5</sup>。音楽教師は学校を去った。報道は宮沢家を攻撃する意図を持っていたと推測されるものでもあり<sup>6</sup>、トシが何重にも深く傷ついたことが推察される。

この恋愛事件とそれ以降の生活を振り返り、トシは1920年2月に「自省録」を記す<sup>7</sup>。その冒頭には、たとえば次のような記述がある——「此の四五年来私にとって一番根本な生活のバネになったものは、「信仰を求めると云ふことであつた」、と。この「自省録」は、過去から目を背けたまま精神的努力を続けた不自然な緊張の為に病を得たと考えたトシが、過去を直視し、またそこから立ち直って生きていくための指針として「信仰」を確立しようと試みるものである。トシは「魂を打ち砕かれ」るような悲痛な過去から立ち直ろうと、「信仰」を求めていく。彼女が求めた「信仰」について、以降検証を加えていく。

## 2. トシと真宗

先述のように、トシは恋愛事件によって深い痛手を負った状態で日本女子大学へと進学した。トシ自身はのちにこの進学を「故郷を追はれた」と振り返っている。ここでは、トシが日本女子大学進学後に師事しようとした真宗僧侶の近角常観に宛てた書簡、及びその二年後に宮沢家に宛てた書簡を扱うことで<sup>8</sup>、トシが真宗の信仰獲得に向けて努力を重ねるも、それを確信するに至らなかった経緯を確認する。

宮沢家は真宗の篤信であった。賢治やトシの父親である宮沢政次郎(1874-1957)を中心とする宮沢一族は、近角常観や暁烏敏(1877-1954)等の革

---

<sup>5</sup> 山根知子『妹トシの拓いた道——「銀河鉄道の夜」へむかって』(朝文社、2003年)、26頁に再録された当時の記事を参照。

<sup>6</sup> 『岩手民報』の出資者がトシの母方の祖父宮沢善治と敵対関係にあったこと、記事がトシを善治の娘であるかのように誤認させる書き方をしている点などから、宮沢一族を攻撃するためにトシの事件が利用された可能性が指摘されている。今野勉『宮沢賢治の真実 修羅を生きた詩人』(新潮社、2017年)、84-90頁参照。

<sup>7</sup> 初出は宮沢敦郎『伯父は賢治』(八重岳書房、1989年)。のち山根前掲書に再録。賢治やトシの末妹クニに形見分けされていたノートであり、1987年にクニの息子である宮沢敦郎によって発見・命名された。以降「自省録」の記述は山根前掲書を底本とする。

<sup>8</sup> 堀尾前掲書、152-154頁。

新的な真宗僧侶に師事していたことが挙げられる。本報告の主題であるトシも、政次郎の指示で近角の営む求道会館を訪れている<sup>9</sup>。トシが近角常観に宛てた書簡は二通現存する。そのうち一通目は「将来に対する希望を持ち得ず従って活気なく元気なく誠に意義なき生活」を送っている自分の現状を綴り、近角に師事することによって現状を脱したいと述べているものである。

二通目のものは深刻さの度合いを増す。トシは訪問のお礼を述べてすぐ、「今の私はどこもかしこも間違ひだらけ、根本からどうにかしなくてはとて駄目である」と畳み掛ける。

この書簡において、トシは近角の『信仰の余瀝』や『懺悔録』を読んだことを報告している。『懺悔録』には、たとえば「此歎異鈔が、眞実自分の生命になり、光明になりて下さるには先づ極端なる罪悪感に陥つたものでなければならぬ<sup>10</sup>」というような主張が散見されるが、トシはこの書簡において、それに従うかのような強い自己否定を繰り返している。しかし、「極端なる罪悪感」に陥っても、近角が説くような「此歎異鈔が、眞実自分の生命になり、光明になりて下さる」実感を持つことは出来なかったようである。結局、こののちトシは近角から一定の距離を置き<sup>11</sup>、日本女子大学への適応を試みていったとされている<sup>12</sup>。

上京直後のトシは強い期待を抱いて近角に接触するも、「どうにも成らない」と感じるに至ったようである。しかしその後も、トシが真宗の信仰獲得に向けて努力を続けた様子がうかがえる書簡が残されている。1917年6月23日付と推定される、「みなさま及び祖父宛」の書簡である。これは同年9月16日に亡くなる祖父喜助に対し、死後の行方が地獄とならぬよう、因果応報の考えに基づき利己的な振る舞いや心掛けを戒めるものである。巻紙2メートル半に及び毛筆でしたためられ、やや異様な気迫に満ちたこの書簡の末尾は、以下のように締めくくられている。

私も大切なる死後のこと一刻も早く心にきめる様にと思ひ居り候へど未だ確かな信心もなく このまゝに死ぬときは地獄にしか行けず候 何卒御一緒に信心をいたゞくように致し度く候〔後略〕

<sup>9</sup> 岩田・碧海前掲書、124頁。

<sup>10</sup> 近角常観『懺悔録』（森江書店、1905年）、9-10頁。

<sup>11</sup> 岩田・碧海前掲書、133頁。

<sup>12</sup> 山根前掲書、89-95頁。

この書簡からは、トシが近角のもとを離れて以降も、真宗の信仰にまつわる格闘を続けていたことが読み取れる。

これまで検討してきたトシの書簡で表明された自己省察は、やや苛烈な自己否定に満ちたものである。その契機となったのは、1914年の恋愛事件にまつわる苦悩と、「極端なる罪悪感」を重視した近角の教えであるように見受けられる。トシは恋愛事件を引き起こした罪悪感に苦しみ、無気力な状態に陥っていた。そうして近角との出会いも、彼の説く道筋に沿った信仰獲得に向けた努力も、彼女に真宗の信仰を確信させるには至らなかったのである。

### 3. 「宮沢トシ自省録」

二章では、トシが近角との出会いを経たのち、真宗の信仰を確信するに至らなかった経緯を確認した。トシはそののち、信仰をめぐり、どのような宗教的理想を見出していったのであろうか。それを探るため、この章では先の二通の書簡よりのちに執筆された、1920年の「自省録」において、トシがどのような告白を行っているかを確認する。

彼女が師事しようとした近角は「告白」の手法を確立していたことが指摘されている<sup>13</sup>。これは近角が運営した求道会館の「信仰談話会」において、懺悔からの安心の獲得の道筋を信徒たちに語らせるもの、また雑誌『求道』に信徒たちの体験談を載せ、活字化するものと、二種類の方法で、信仰の告白を共有させるものである。語り手にとっては自己反省を、受け手にとっては信仰獲得の指針を与える場を形成したことに、近角の独自性があった。いずれも自身の体験、「実験」を重んじ、体験の告白から信仰の確立を語るのをなぞらせるような手法である。

トシの「自省録」は、過去の恋愛事件の反省を行い、そこから信仰を確立していこうと試みるものである。過去の体験の反省から信仰を確立しようとする記述は、近角の「告白」の手法を踏襲したものであるかのように見受けられる。

この「自省録」には、成瀬仁蔵の影響がうかがえる記述も見出せる。成瀬は全学必修の「実践倫理」という講義を行っていた。これは学生の人格形成と校風養成の中心として行われたものである<sup>14</sup>。トシはこの「実践倫理」の宿題に「信仰とは何ぞや教育とは何ぞや」という課題が出されたとき、「魂を込めて可成り長い論文を書いた」と振り返っている。

<sup>13</sup> 岩田文昭『近代仏教と青年——近角常観とその時代』(岩波書店、2014年)、64-69頁。

<sup>14</sup> 青木生子『いまを生きる成瀬仁蔵——女子教育のパイオニア』(講談社、2001年)、155頁。

「自省録」の記述は、近角からは「告白」の手法を、成瀬からは「信仰とは何ぞや」という問いを継承しているといえる。

そのような反省を経て、トシは宗教的理想を綴るに至る。トシはかつて抱いた利己的で排他的な愛とは対照的なものとして、「凡ての人に平等な無私な愛を持ちたい」と綴る。「また「願わくばこの功德を以て普ねく一切に及ぼし我等と衆生と皆俱に一」と云ふ境地に偽りのない渴仰を捧げる事」を欲する。さらに、「一念三千の理法や天台の学理」や、「小乗的傾向を去って大乘の煩惱即菩提の世界」などに「憧憬と理想」を抱いていると述べる。これらの記述には『法華経』の世界観に惹かれていることが示唆されている<sup>15</sup>。

以上から、トシはこの「自省録」において、近角の「告白」や成瀬の「信仰とは何ぞや」という課題に影響を受けつつ、過去の反省から、宗教的理想を見出し、いったのだと考えられる。

この「自省録」の最後には、宗教的理想を打ち立てると同時に、おそらくは教師として母校である花巻高等女学校に赴任するにあたっての決意も述べられている<sup>16</sup>。それは「恢復された人生に対する勇氣と自由とをこれからの彼女〔執筆注、トシ自身をさす〕の仕事に表わさねばならぬ」というものである。ここに、法華経への憧れを示唆すると同時に、「仕事」についての決意が見られる点に注目したい。詳細は次章で扱うが、トシは恋愛事件の恥を雪ぐため、立身出世の強い願望を持っていた。しかし、当時の真宗の言説の中では、自身の将来像を思い描くことが出来なかった可能性があるのである。

#### 4. トシと当時の女性観

二章ではトシが近角と接触したのち、真宗の信仰獲得に向けて努力を続けた軌跡を確認した。それを受け、三章では、トシの「自省録」が、近角や成瀬に影響を受けつつ、過去の反省を行い、宗教的目標を打ち立てようとするものであったことを確認した。そうしてトシが抱いた理想は、「凡ての人に平等な無私な愛」を抱くことであった。同時に、法華経の世界観への憧れを示唆しつつ、「仕事」への決意を述べるものでもあった。

トシは何故、このような記述を行うに至ったのだろうか。この章では、トシが信仰を獲得しようと葛藤した道筋には、当時トシが接した女性観と、それに影響を受けた、進路選択の悩みが反映されているという仮説を提示する。

<sup>15</sup> 岩田前掲書、204-205頁。

<sup>16</sup> 山根前掲書、66頁。

トシの葛藤の内実を探る手がかりは、トシが進路に悩んでいたことに求められる。資料として、トシが賢治と互いの進路について相談をしていた書簡が遺されている。以下に引用する1918年11月24日付のものが、それである。

〔前略〕ともかくにも真生活の方法と職業の一致の外に望ましき生活法ハ考えられず候 一人ノも一家もその天職を見出して之を遂げたくと折角ねがひ居り候 現在のような怠け者にてハ随分と心細く候へどもこの望みの空なるものとも思はれず候 現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などを忍ばれて四十年一日の如く教育に我を忘れらるゝ校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候 ともかく私もこれから怠らず成るべく早く然し焦らずにこれを見出したく存じ候

無責任な理想を申し上ぐるならば兄上様自身の天職と一家の方針とが一致することが何よりも望まれ候 家族が必要な援兵としてでなしに只の足手まといになる事ハお互ひに不本意なることに御座候 この事ハ人ではなくこれからの婦人自身の覚悟を要する事と思はれ候 一家の長として心進まぬ働きを強いてまでも衣食の安全を求めたり着飾ったりする寄生婦人の一人にても多き程国家全体の不幸と存じ候 然し決して今の流行の思想にかぶれて婦人運動の何のと云ふ事にてハこれなく候 家政や家庭教育や育児や皆立派なる働きの分担と存じ候  
とんだ方へ入り候

この書簡において、トシは成瀬仁蔵への尊敬の念を示しつつ、未だ将来の職業について模索している段階であることを述べる。また婦人の役割については、婦人運動に対しては距離を置きつつ、「家政や家庭教育や育児」を「立派な働きの分担」であると言及している。「とんだ方へ入り候」と言いつつ、進路相談においてこのような表白を行ったことは、婦人の果たすべき役割が、トシ自身の進路に関連する、のびきならない問題として意識されていた可能性を示唆する。ここでトシが認識している婦人の役割は、「家政や家庭教育や育児」といった、家庭内のものである。同時代の多くの思想家や宗教家によって提唱された国民道徳が、婦人の役割を家庭内に限定するようなものであったことは、諸家に指摘されている<sup>17</sup>。トシの認識も、この同時代の枠組みの中にあるといえる。

<sup>17</sup> 関口すみ子『国民道徳とジェンダー——福沢諭吉・井上哲次郎・和辻哲郎』（東京大学出版会、2007年）など。

ここで留意すべきなのは、トシがかつての恋愛事件の汚名を雪ぐために、立身出世をする必要があると思いつめていたことである。かつて近角に宛てた二通目の書簡には、トシ自身の立身出世の願望が述べられている。「あらゆる心配苦勞を親にかけ、親を涙させるような事をして、三月の末、或る意味の敗北者として、故郷を離れ、のがれて参りました。どうしても、その恥を雪ぎます為に、又親師長の心配に報ひる為にも私は、勉強して、成業の道に進まなければならないので御座います。」というくだりである。トシにとって、恋愛事件の克服は立身出世によってなされるべきものであったのである。

トシは恋愛事件の直後に進学が決まり、上京して近角に師事することとなった。この近角は、男女で悟りに違いがないと認識する点、女性の役割を高く評価する点など、比較的リベラルであり、女性の信者も多かったが、女性の活躍の場を家庭に限定して語る点では、同時代の女性観と共通していたと指摘されている<sup>18</sup>。

トシが近角に師事するよう手配した、政次郎の女性観も確認する。「五障三従<sup>19</sup>」のような価値観は当時の仏教者にひろく見られるものである。政次郎も、女性はその性別ゆえに、罪障があると看做していた。トシの妹である次女シゲ(1901-1987)によれば、政次郎は「女トイフモノハ、カワイソウナモノダ。コンド生レカワツテクルトキハ、オ前タチヲオンナデハナク、男ニ生レテ来サセタイ」<sup>20</sup>と発言している。政次郎の女性観がこのようなものであったことは、二章で扱った近角宛書簡や、三章で扱った「自省録」において、トシが自身の女性としての属性に言及しない記述を行っていたこととあわせ、十分に注意する必要がある。

ここまで、トシと直接接点のあった人物の女性観を検証してきた。そのほかの同時代の真宗僧侶による女性観には、どのようなものがあつたらうか。たとえば、政次郎が非常に熱心に師事していた真宗僧侶に、明治期の「精神主義」運動の中心的な担い手のひとりであつた、暁鳥敏<sup>21</sup>がいる。この暁鳥は、『新氣運』において「八、婦人問題」という章を設け、「男子は社会の為に身を献ぜん」と

<sup>18</sup> 碧海前掲書、152-154頁。

<sup>19</sup> 女という性がもっているとされた、五種の障碍と三種の忍従とをいう。女性は梵天王・帝釈天・魔王・転輪王・仏になることはできない、というのが五障。幼時は親に従い、結婚後は夫に従い、年老いては子に従う、というのが三従である。(中村元監修『新仏教辞典』(誠信書房、1980年)、175頁参照)

<sup>20</sup> 森莊巳池『宮沢賢治の肖像』(津軽書房、1974年)、221頁。

<sup>21</sup> 政次郎と暁鳥の交流については、栗原敦[編注解]「宮沢賢治周辺資料：金沢大学暁鳥文庫蔵 暁鳥敏宛 宮沢政次郎書簡集」『金沢大学文学部論集』創刊号(文学科篇、1981年)、49-107頁参照。

す、女子は男子の為に身を献げんとす<sup>22</sup>』と述べている。ここで暁鳥は、男女の役割の違いを強調している。

「精神主義」を展開した浩々洞においては、女性向けの仏教雑誌、『家庭』（1901-？）が発行されていた。これは浩々洞機関誌である『精神界』と「新夫婦の如く並行した」ものであり、「精神主義」への賛同者たちも、関わっていたものである<sup>23</sup>。この雑誌は「仏教の根底に立ちて記されたる唯一の宗教的女学雑誌」と宣伝されていたが<sup>24</sup>、そこにおいて、「本来個別的であるべき個人としての「女性」救済のあり方を、実は「家庭」における主婦の救済として一般化」するような記述がなされていたことが、指摘されている<sup>25</sup>。無論、当時の真宗僧侶も一枚岩ではない。しかし、「唯一の宗教的女学雑誌」として宣伝されていた『家庭』において、トシが望むような進路像、すなわち立身出世を果たしつつ、宗教的に救済される婦人の姿は、提示されていなかったといえる。

先に紹介したように、トシは近角に宛てた書簡において、立身出世の願望を訴えている。そうしてその近角から、婦人の活躍の場を家庭に限定する説教を聞かされた可能性がある。恋愛事件の恥辱を雪ぎたいという焦燥に駆られ、立身出世をしなければならぬと思ひ詰めたトシである。それを伝えた相手が、女性の救済のありようとして、活躍の場を家庭に限定するような説き方をしていたことは、非常に受け入れ難く感じられたのではないだろうか。トシが描こうとした自身の将来像と、トシが触れ得た範囲での女性の宗教的な救済像には、ずれがあったと考えられる。そしてそのずれが、トシが真宗に留まらず、法華信仰へと転じていった理由であった可能性も、浮かび上がってくるのである<sup>26</sup>。

## おわりに

本報告ではこれまで、トシが実人生の事件を契機とした、苦しい精神状態を脱しようと葛藤した軌跡を確認してきた。またその葛藤には、当時のジェンダーにかんする言説が何らかの影響を与えていたという仮説を検証した。トシには立身出世によって過去の汚名を晴らそうという焦燥があった。しかし当時トシ

---

<sup>22</sup> 暁鳥敏『新氣運』（丙午出版社、1912年）、60-61頁。

<sup>23</sup> 福島栄寿『思想史としての「精神主義」』（法蔵館、2003年）、170-173頁。

<sup>24</sup> 福島前掲書、184頁。

<sup>25</sup> 福島前掲書、201-206頁。

<sup>26</sup> トシが法華信仰の道を歩み始めた具体的内実については、資料の限界もあり本報告では踏み入れない。彼女の法華信仰の内実を明らかにすることは今後の課題である。

が触れ得た女性の宗教的な救済のありようは、家庭に尽くす婦人像と等しいものとして語られていた。このような女性の救済像と、トシが自身に望んだ理想的将来像には、大きなずれがあった。それゆえトシの葛藤は続いた。そして最終的な理想として、法華經の世界観に惹かれていることを示唆しつつ、「凡ての人に平等な無私な愛を持ちたい」という宗教的理想を綴るに至ったというのが、本報告の結論である。

トシが婦人としての救済を得たいと願ったのであれば、道筋はごく分かりやすく示されていたはずである。すなわち、家庭に従属的な婦人の役割を担う、自身の将来像を描くことである。しかしトシは、自身の女性という属性については言及しない。トシが自身の女性という属性を問題にしないで記述を行ったことは、彼女が女性という属性から自由であったことと、直ちに等価にはならない。むしろ、触れ得た宗教的文脈における婦人道德に一切言及しないのは、一度は婦人の救済像を意識した上での、脱色だったのではないだろうか。「自省録」における記述は、彼女の葛藤が、具体的な苦悩の次元を飛び越えたいという願いとなって結実したものであるという推測も、うがちすぎたものであるように思われないのである。

トシ自身の生涯はごく短いものであり、遺されたテキストにも限りがある。トシは文学者宮沢賢治の妹でなければ、おそらく語り継がれることのない存在でもあっただろう。しかし本報告で扱ったように、トシは単に創作者宮沢賢治にとっての夭折した妹というモチーフに留まらない。トシという存在は、近代日本の宗教と女性、社会と女性を考察する際の、重要な手がかりとなるだろう。